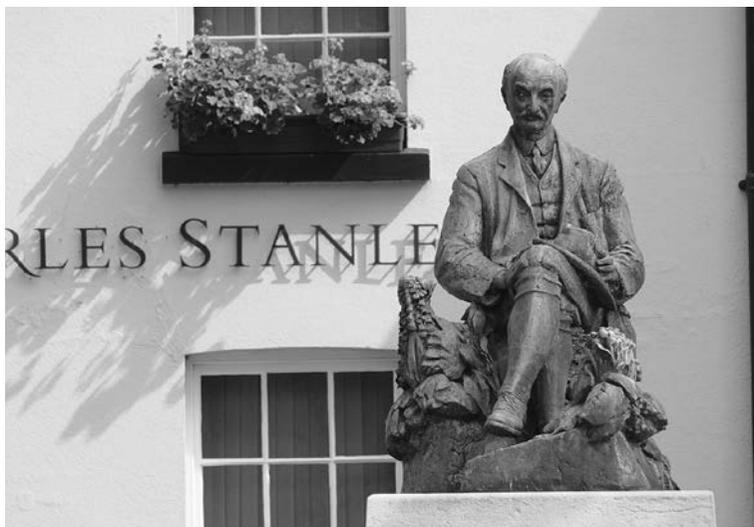


日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第73号 (2013年4月15日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3  
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会  
編集者 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 中部大学 西村 智



ハーディの銅像

撮影：武井暁子氏

## 『詩集 I』の翻訳と編集を終えて

渡 千鶴子

ここ2年、執筆を依頼する側にいたために、その反対側になるとは思ってもみなかった。

さて、『詩集 I』（第1～第3詩集）の訳者は20名（内5名が編集者）、第4詩集は森松健介氏である。第1～第3詩集の翻訳は、主に関西在住の研究者によって行われた1989年2月から2006年4月までの読書会（毎回2編程度を輪読する）に端を発しているの、ハーディ全集の翻訳の中では、最も訳者が多く長期に及ぶ。約17年の間には、ご逝去や退会者あるいは入会者があつた。読書会が続いたのは、議論が伯仲して時の経つのを忘れてしまう程ハーディの詩が魅力的であつたからだろう。

編集会議は2007年4月から足かけ3年に20回近く開き、その後は主に電子メールを連絡の手段とした。読書会で討論し十分に内容を解釈して、正確な日本語の訳稿ができ上がっているの、それを編集すれば事足りると思うが、実際にはそう簡単ではなかつた。読者が、20名の日本語訳を通読した時に違和感を持たないように、まず原書をJames Gibson編の*The Complete Poems of Thomas Hardy*に決めて、書式と表記を統一した。その際、出版事情を鑑み、2段組みで、できる限り漢字を使い、句読点を省いた。訳者は訳稿を再考して編集者に提出し、編集会議では訳稿

を検討して、修正点や要望点を添え、記者に返却するという作業を繰り返した。この作業から多くのことを学んだ。誤訳、誤記の訂正は当然ではあるが、英詩の解釈、日本語の語感、使用語彙、言葉の解釈など各人それぞれ違う。持ち味や主義主張も違う。統一的見解をどこまで踏襲するか、記者の考えをどこまで重要視するか難航する場合もあった。編集者間でも、意見が分かれ、取り決めた内容が変化することもあった。自分自身の中でも、同じ作品の読みが年数を経ると変化する場合があるのだから、共訳の場合多種多様である。例えば表記の統一（制作年と場所名）を挙げると、詩番号49は1867.8 *Adelphi Terrace*、詩番号188は *W.P.V., 1865-67*、詩番号189は *8 Adelphi Terrace, 21 April 1867*である。制作年が先に来る場合と、後に来る場合がある。場所名はフルネームもあればイニシャルもある。原文に忠実になれば、訳語から整然さが失われる。ある批評家は「制作年が実際に制作した年ではない場合がある」と言う。であれば表記の統一は仔細なことにもなる。

以下数編の詩に関する所感を述べてみる。「フェニックス・インでのダンス」は、比較的長い物語詩である。「歓喜の叫び 剣の輝き 太鼓の響き」に呼び起こされたジェニーは、横で眠る夫の下を抜けだして、フェニックス・インへと導かれる。音楽によって催眠術をかけられたようなこの展開は、短編「リール舞曲のヴァイオリン弾き」を想起させる。この詩には多くのダンス曲名が示されるが、そのうちの1曲「兵士の喜び」は、『はるか群衆を離れて』で、トロイとパスシバが結婚した後のパーティで踊る曲でもある。Samuel Hynes 編の *The Complete Poetical Works of Thomas Hardy*には、ト音記号がなく1小節にも満たない2種類のリズムだけが不統一に示される楽譜が付記されている。これは「現在」と「過去」という「時」のリズムの中で、千々に乱れるジェニーの心理を象徴しているようだ。あと1曲「ロッディの橋」は、ハーディが好んだ曲であり、「ロッディの橋」として詩も書き、‘Loddy’ と発音するようにと注記までしている。1887年にはエマと共にこの地を訪れていて、壮大な詩劇『霸王たち』にも描いている。『霸王たち』では軍馬が、『テス』では鼠や雉が、『ジュード』では豚や兎が殺されるが、ハーディの動物に対する深い思いは頌歌「同情心」に溢れている。あの有名な「薄暗がりの中の鶴」と「ある八月の真夜中」を比較せよと言うF.B.Pinionの言葉に誘われ、この2編の間にある5編も一緒に読んでみると、ハーディが、すべての生き物は同等の価値を持って生きているという価値観を7編に浸透させていることがわかる。軽快な繰り返しのリズムを伴う villanelle や triolet の詩形の中に生き物の必死の叫びを読み込み、人間がその傲慢さや残酷さから、早く目覚めるようにと詠っている。英国の Hardy Conferenceには、世界中から研究者だけでなく愛好者が参加し、詩の朗読会が必ず催され盛会である。しかし日本では、研究者以外の人が詩を読む機会はほとんどない。ところが、今回一般大衆にも読まれ感動を与えるものであることがわかった。と言うのは、「婚約した未亡人」と「最後の菊の花」を身近な者が偶然読み、ひどく感激して、何度も書き写し、それだけでは満足できず、書き写した詩を周りの人達に読むようにと勧め、遠方の人にはファックス送信した。勧められた人達の読後感は、詩の内容が心情と溶け合い感動に包まれた、気に入った語彙がたくさんあった、想像力がどんどん広がった、空で詩を吟じて楽しんでいる、他の詩も読んでみたいなどであった。これらの感想を聞いて、「研究者しか詩を読めないと傲慢にも思い込んでいるのではないかと、ハーディが言っているような気がした。確かに研究者のようには理解できなくても、詩が感性に訴えるものであるのなら、大衆も味わえるのだ。もっと積極的にハーディの詩の面白さを流伝した方がいいのかもしれない。最後に研究書にも言及しておこう。Cornelia Cook の *Life and Works*には、第1詩集や第2詩集の序文、「偶然」「しるしを求める者」、一連の戦争詩、そして「イエラムの森の物語」「神への教育」などの引用があり、これらの詩が、ハーディの後期作品と思想に関する彼女の論考に厚みを与えている。

ハーディの詩が、長編短編を問わず小説、詩劇、そして研究書と密接な関わりを持っていることを改めて実感する今日この頃である。

# 死に至る迷信

武井 暁子

ハーディ作品の中心舞台ウェセックスはハーディの故郷ドーセットシャーがモデルだ。ドーセットシャーについて、例えば、ジョー・ドレイパーは、ハーディの時代、ドーセットシャーは後進性と農業労働者が置かれた劣悪な生活環境のため、イギリス中の軽蔑の対象となっていた、と言う。メリリン・ウィリアムズも同様に、ドーセットシャーがイングランドの中でもとりわけ後進地帯の一つとして悪名高かったのは貧困と工業化が遅れたためであり、そこからハーディ作品に描かれるウェセックスが古い慣習や迷信が色濃く残る世界になっていると述べる。

実際、ハーディのウェセックスは科学技術と合理性から隔絶され、迷信、呪術、超自然的現象がごく当たり前のよう受け止められる共同体だ。非科学的事象への盲信と恐れはウェセックスの住人の人となりの形成に重要な役割を果たし、時として生死にかかわる。一例として、短編「呪われた腕」(“The Withered Arm,” 1888)を読み直してみるとこうなる。

「呪われた腕」の主人公は魔女と噂される乳搾りローダと、ローダの雇い主ロッジの新妻ガートルードである。ローダはロッジとの間に息子をなした後、捨てられたためガートルードに複雑な思いを抱いている。一方、事情を知らないガートルードは雇い主の妻としてローダに対して鷹揚に振る舞い、息子にも気を配るため、ローダは愛想よく従順な態度を保たざるをえない(北条政子のように夫の愛人宅を打ち壊したり、江戸時代の日本女性のように後妻打ちをする<sup>うわなり</sup>というのとはまた違う)。ガートルードの夢の中で彼女の左腕を瘡が出来るほど強く掴むローダとそっくりの夢魔は、墓の上を死に至らしめる六条御息所の生霊と同じく、ローダのはけ口を失い内向した感情が具現化したものと解釈できよう。さらに踏み込めば、ガートルードは夫とローダの関係をうすうす察しており、彼女のローダに対する罪悪感や贖罪の気持ちが夢魔を生み出したと見ることもできる。

墓の上と違い、ガートルードは夢魔の呪いでは死なない。その代り、ガートルードの左腕は次第に醜く萎縮し、夫婦仲は冷え切る。結婚当初のガートルードの幸福そうな様子はみじんもなくなり、以前馬鹿げていると思っていたインチキ療法や薬にすぎる有様だ。ローダのロッジとガートルードへの復讐は、まず迷信に誘発されての夫婦仲の破綻という形を取る。

ガートルードは人生の最期でもまた迷信に翻弄される。一向に治癒しない左腕に業を煮やし、彼女は意を決し、ローダが教えてくれた占い師トレンドルを訪ねる(ちなみに『ダーバヴィル家のテス』(Tess of the d'Urbervilles, 1891)には、トレンドルの後を継いだ息子への言及がある)。トレンドルは、処刑された直後の死刑囚の首に両腕を押し付け、血を逆流させるようにと助言し、ガートルードはその通りにする。しかし、死刑囚は実はロッジとローダとの息子であり、ガートルードはローダに罵倒され、夢の中と同様に掴みかかられ、「血が逆流しすぎて」3日後に死亡する。もちろん、死刑囚の遺体に触れただけで血が逆流し、急死することはありえない。科学的に考えるなら、ガートルードの死因は夫とローダの関係を目の当たりにしたことと、今まで目下だと思っていたローダに実力行使を受けたことによるショックで心機能が急激に低下したためであろう。

「呪われた腕」をガートルードの視点から読むなら、裕福な家に生まれ、教養もあり明朗な女性が夫の過去の愛人の影に怯え、奇病にかかり、夫の愛を失い、容姿と夫を取り戻すために迷信に頼った果てに命を落とす悲劇ということになる。生来快活で合理的思考の持ち主であるガートルードが陰気で迷信深くなる様は、彼女が理性や常識が通用しないウェセックスに飲み込まれてしまったことを意味し、『帰郷』(The Return of the Native, 1878)の主人公ユーステイシアがエグドン・ヒースから脱出を切望しながらも果たせず、一生を終える姿を思い起こさせる。

一方、ローダの視点に立つなら、「呪われた腕」は一人の地位も財産もない女性が超自然的な力により自分を蔑ろにした男とその愛妻に復讐する物語である。注目すべきは、ローダはなぜ自分が魔女と噂されるのかわからず、彼女が夢の中で見た通りにガートルードが負傷すると、むしろ困惑している点だ。ローダに備わっているとされる呪術的な力は彼女に危害を加える人間が現れた時だけ、彼女の意図を超えた形で発揮され、その都度、彼女にも不幸をもたらす。ガートルードのように悲惨な最期は迎えないものの、ローダも非科学的事象に翻弄された犠牲者といえるだろう。

迷信と非科学性を手掛かりとしてハーディが描くウェセックスの世界を読み解くと見えてくるのは、ヴィクトリア朝中産階級が信条とした自助 (self-help) の否定だ。ローダとガートルードだけではなく、長編小説の主人公—ユーステイシア、テス、ジュード—たちも自力で苦境を乗り切ることが出来ず、環境や社会的圧力の前に屈せざるを得ない。『デイヴィッド・コパフィールド』(David Copperfield, 1849-50) で、大叔母ベッツィの破産後、「自分がすべきことは決然とした強い心で働き、若き日の血のにじむような修練を生かすことだ。自分が成すべきことは樵の斧を持ち、ドーラにたどりつくまで木を切り倒し、苦難の森を抜け、進むべき道を切り開くことだ」(36章)と奮起する主人公デイヴィッドが自分の才覚で逆境を克服し、事態を好転させようとする前向きさや楽天的なまでの自信を持っているのと比べて、ハーディ作品の登場人物たちの人となり生き方は好対照をなす。ハーディ自身は“self-made man”でありながら、作品ではなぜ“self-help”が否定されるのか。その答えの一つが、超自然的事象や非科学的なものに信をおくウェセックスの人と風土にある。

## ちょっと恥ずかしい話

奥村義博

「男ってものはあぶないって、なぜお母さんは言ってくれなかったの？ どうして注意してくれなかったの？ お嬢さん連中は、こんな手管のことを書いてある小説を読んで、身の守り方を心得ているけれど、あたしにはそんなふうに教わる機会もなかったし、それに、お母さんもあたしを助けてはくれなかったわ！」(井上宗次・石田英二訳)

小説のこのような効用をテスがいつ、どのように知り得たかの詮索は置くとして、小説が男と女の間起きることを描いて、読者を教え楽しませてきたことは、改めて指摘するまでもありません。ですから、教室で小説について語る、教えるということは、何らかのかたちでそのような事柄について、語り教えるという側面を持つことになるでしょう。しかし、それは、そもそもどういうことなのでしょう。教える側の人間をどのような立場に立たせることなのでしょう。男と女の間起きることを〈性〉にまつわる事柄とひろく捉えて、このご時世に無粋きわまることは承知のうえで、すこし考えてみたいと思います。

〈性〉にまつわる事柄が小説のなかで取り上げられるのは、ボルノグラフィーでない限り、人間の心や人間関係、あるいは恋愛や結婚などについて、何らかの真実を表現するためでしょう。作家はその人間理解に基づき、芸術家としての計算や直観に従って、〈性〉にまつわる事柄を作中に造形し、その真実を具象化しようとしています。

しかし〈性〉にまつわる事柄は、すべてがあからさまに語られるとは限りません。その社会で許容される基準やディコーラムとの力関係で作家が筆を控える場合もあれば、芸術的効果のためにあえて隠す場合もあるでしょう。ですから、教える立場に立つ人間には、その批評スタンスが

どのようなものであっても、語られていない事柄を、まずは透視することが求められることになります。

ここでひとつ問題が生じます。〈性〉にまつわる事柄について知識や経験値が、作家と教える立場の人間との間で一致するとは限らないという問題です。様々なケースが考えられますが、現実には、教える立場の人間のそれが作家のそれに及ばないことの方が多くはないでしょうか。作家は教壇に立つ人間に比べ、もともといわゆる人生経験が豊かであるように思われますし、〈性〉にまつわる事柄を含め、人間の世界を貪欲に探求するより強い意志とより多い機会を持っているように思われるのです。

厄介なことには、子供と大人を比較してみれば分かりやすいのですが、〈性〉にまつわる事柄についての知識や経験値に大きなギャップがあった場合、そうしたギャップが存在していること自体が教える人間には自覚できないこともあり得るでしょう。先行研究に触れることで足らざるところを補うことはできるでしょうが、間接的な知見であることは否めません。

ことを更に複雑にするのが、ジェンダーの問題です。小池真理子さんと唯川恵さんが対談のなかで次のように語っています。

唯川 本当に“女”が知りたかったら、絶対に男性作家の恋愛小説を読んじゃだめだなと思います。

小池 何のお勉強にもなりません。(笑)

唯川 世の男性には、ぜひ女性作家の恋愛小説を読んで、女について学んでほしいですね。

小池 そうそう。でも、その意味で言えば、女性の書く男性がステレオタイプであってもいいと思うのよ。

唯川 だって恋愛って、相手の男の内実は実際はどうでもいいんですから。でもそういう恋愛の本音を書くと、あまりにあけすけで男の人はがっかりするみたい。男の人が女性に対して抱いている幻想って途方もなく大きいから。(『秘密』)

教える側に立つ人間は、〈性〉にまつわる事柄を取り上げるにあたっては、自身と作者のジェンダーが課しがちな幻想や思い込み・刷り込みを意識しながら、自身の読みを相対化してみる必要もあるのでしょう。

このように、隠されていることについて教えようとする時、〈性〉にまつわる事柄には、教える者を否応なしに何重にも慎重にさせてしまいかねない困難があるということが出来ますが、実はもうひとつ、別の困難がついて回ります。それが、自身の〈性〉にまつわる事柄についての経験値を学生達の前で公にすることになりかねないという問題です。

自然科学や社会科学とは異なり、人文科学とりわけ文学も含まれる芸術分野においては、教えることは何らかのかたちで自身の内側をさらけ出すことに繋がるところがあるのかもしれませんが。この場合もそのひとつと覚悟を決めるべきなのかもしれませんが、教える側にも教えられる側にも、そうした認識が共有されているとはとても言いがたいのが現状でしょう。教える側の一方的で突出したストリップティーズになりかねませんし、悪くすればハラスメントにもなりえます。

このように眺めてくると、小説を教室で取り上げるにあたっては慎重な吟味が望ましいことが分かりますし、実際にも熟慮のうえで選択がなされているのでしょう。ですから私は、例えば『チャタレー夫人の恋人』を取り上げてきちんと学生に読ませる先生には、皮肉でもなんでもなく、驚嘆せずにはいられないのです。そして、作品によれば、ハーディも教室で取り上げるのが「やばい」作家になりうると思うのです。例えば『テス』における自然を問題にしようとすれば、〈性〉についてもかなり突っ込んで説明しなくてはならなくなるのではないのでしょうか。

教える側が引き受けることになる問題や困難を考えてみると、あらためて、そもそもなぜ例えば『テス』を学生にきちんと読ませようとするのか、という問いに行きあたります。答えは様々あるでしょうが、それがどのようなものであれ、学生にも素晴らしいものを眺めさせたい、自分と同じような文学的興奮を味わわせてやりたい、という情熱が出発点になっているのではないのでしょうか。この純粹な情熱があって初めて、教える者は、これまでに述べた問題や困難を謙虚に引き受けつつ、〈性〉にまつわる事柄についても、学生達、自分自身、そして登場人物のセクシュアリティをリスペクトしながら、自由に語るができるのだと思います。恥ずかしさは原点を再確認させるものなのです。

## 「*The Return of the Native*における『古代』のイメージ」補遺

唐 戸 信 嘉

昨年、武庫川女子大学における日本ハーディ協会第55回大会で、私は「*The Return of the Native*における『古代』のイメージ」と題して研究発表を行い、1870年代のThomas Hardyの歴史認識を考えるにあたって文献学者William Barnesからの影響を考慮する必要性について提議したのであったが、その際発表時間を鑑みて省かざるを得なかった点を補遺としてここに記しておきたい。

近代の文献学 (philology) は言語のみならず神話、宗教、習俗のような民族 (Volk) の構成要素を広く探求する学問であり、若き頃のBarnesの民話や習俗の蒐集熱もまた文献学に発している。そしてHardyも同様に1860年代末からDorsetの迷信や習俗の蒐集へ着手しているのである。Barnesのフォークロアへの関心は1830年代に遡り、その成果は*The Gentleman's Magazine* 投書欄やWilliam Hone's *Year Book*, *Dorset County Chronicle*への寄稿文中に散見される。*Year Book* への寄稿文は後に*Some Dorset Folklore*として復刊されており、これを見ると、例えばHardyの愛読者ならたちまち既視感に襲われる次のようなヨハネ祭前夜の習俗に関する記述がある。“Midsummer Eve . . . is the great time with girls for discovering who shall be their husbands. . . [A] maiden will walk through the garden at midsummer . . . and throw hemp-seed over her right” (8). いうまでもなく、大麻の種を撒いて未来の夫を占う行事は*The Woodlanders*の第20章に生き生きと描出されている。また、*DCC*への寄稿文中には*The Return of the Native*中で印象深い身振り狂言に関する報告があり、トルコの騎士の成敗は十字軍遠征に由来するとBarnesはその起源を語っている (Chedzoy 55)。そしてまた、*The Return*の冒頭を飾り、古くは古代ブリトン人の儀式に遡ると語り手が述べる bonfire については、Barnesの*Notes on Ancient Britain and the Britons*に解説が見出せる。BarnesもHardyも、フォークロアに強い関心を抱いていたのである。

ここで彼らと同時代人でDorsetのフォークロア研究に足跡を残したもう一人の人物、J. S. Udalに触れておかねばならない。Udalは1848年生まれの子爵で、郷土の習俗に興味を抱き、1870年代には先の*DCC*にフォークロアの寄稿欄を設け、またDorset Natural History and Antiquarian Field Club (Barnesは1875年設立当初からの会員である) に属してDorset習俗の蒐集に努めた。HardyがUdalと知り合ったのもこの会合においてで、このクラブの雰囲気は*A Group of Noble Dames*にその一端を窺うことができよう。後にUdalは*Dorsetshire Folklore*を出版した際、その序文でBarnesとの思い出を語り、更に“his great successor”としてHardyの名を挙げてもいる (qtd in North)。1870年代から80年代の時期においてDorsetの習俗研究は最盛を迎え、Hardyは確かにその活気を共有していたのである。いわばそこにはフォークロア研究を通じてDorset文

化を見直す親密な空間が存在していた。

では、彼らはこうしたフォークロア、*The Return*中の言葉を引用すれば、その住人にとっては「秋に生える茸」(“the fact of mushrooms coming in autumn” (136))以上のものではない習俗のうちに、何を見ていたのか。Barnesは*Homilis Domus* (1849)で土地への帰属を人間の実存に関わる問題とし、19世紀を通じて加速化した移住に強く反対しているが(Chedzoy 116)、Hardyも*Far from the Madding Crowd*への序文(1895)で“migratory labourers”の増加が“a break of continuity in local history, more fatal than any other thing to the preservation of legend, folk-lore, close inter-social relations, and eccentric individualities”(*PW* 10-11)をもたらしたと述べ、Dorsetの郷土文化の消失を憂慮している。*The Return*のClymの「帰郷」は、職を求めて植民地や都市への移住が当然となりつつある世相に対し、土地への帰属を問い直す議論を提出するのである。語り手はClymについて、“his estimate of life has been coloured by it [Egdon]” (171)と云ってその実存が郷土に根差していることを仄めかしているが、それは風景だけの問題でなく、土地の習俗の数々、冬至の篝火、トルコ騎士の無言劇、五月柱といったものとも密接に結びついていることは、これらを執拗に描き込んだHardyの態度のうちに読み取ることができる。先に引いた序文の言葉に窺えるように、フォークロアは土地の個性を構成する不可分な要素なのであり、そのアイデンティティのひとつなのである。

Isaiah Berlinは、近代文学の祖の一人でフォークロアの提唱者J. G. Herderについて論じて、19世紀ヨーロッパに発生する“All regionalists, all defenders of the local against the universal”が、たとえ意識せずともその思想をHerderに負っていると述べている(176)。その点では、もとより文学者であったBarnesのみならずHardyも“the universal”に対して“the local”を擁護するHerderの使徒と云うことができ、文学とHardyの思想的鞆帯はこの地方主義という観点からも確認できよう。近代化が農村の荒廃と人口流出を引き起こし、地方人を都市や植民地へと離散させている現状に対して、Clymのように帰郷する人物を描くHardyの姿勢には、明らかに“regionalist”たる自負がある。彼は拡散へ向かう現状に逆らって、Dorsetという土地および歴史の細部へと求心的に潜り込んでゆくのである。更に付け加えるならば、文学とHardyの接点は、彼のいう「歴史」の性質を問う際に有効な視点を提供するだろう。というのも、文学からはフォークロア研究、考古学、人類学が派生してゆくが、HardyのDorset史への理解もこうして枝分かれした人文科学を吸収することで成長を続けるからである。Hardyの歴史認識は文学に発するlocalなもの細部へ下降してゆく眼差しに支えられている。その意味でも、文学者Barnesとの出会いは彼にとって決定的な意味を持ったのである。

#### 引用文献

Barnes, William. *Some Dorset Folklore*. St. Peter Port: Toucan, 1969. Print.

Berlin, Isaiah. *Vico and Herder*. London: Chatto and Windus, 1980. Print.

Chedzoy, Alan. *The People's Poet: William Barnes of Dorset*. Stroud: History Press, 2010. Print.

Hardy, Thomas. *The Return of the Native*. Ed. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.

---. *Thomas Hardy's Personal Writings*. Ed. Harold Orel. London: Macmillan, 1967. Print.

North, Mark. “John Symonds Udal.” 29 May 2012. *Dorsetarian Online Journal*. Dark Dorset. Web. 3 January 2013 <[http://www.darkdorset.co.uk/the\\_dorsetarian/10/](http://www.darkdorset.co.uk/the_dorsetarian/10/)>.

# ハーディ研究の昨今—J. ヒリス・ミラーの場合

西村 智

ハーディ研究でも有名な J. ヒリス・ミラーは、1960年代においてはジュネーヴ学派の「意識の批評」をアメリカ人として実践した代表的存在と見なされていた。1970年に出版された彼の『トマス・ハーディー距離と欲望』は、大雑把に言えば、そのような批評的実践の一例である。だが、この著作はまた、クリストファー・ノリスも指摘するように、ミラーが意識よりも意識を具現化する言語の重要性に気づき始めており、彼の批評活動が一つの転機に差し掛かったことを示唆するものでもある(95)。実際、彼はその後ジャック・デリダやポール・ド・マンらの仕事に惹かれてゆき、1970年代にはいわゆるイエール脱構築派の批評家として知られるようになる。この立場から書かれたものとして有名なのが、1982年に出版された『小説と反復』であり、そこには二つのハーディ論—『ダーバヴィル家のテス』と『恋の霊』についての章—が収められている。

ここまではよく知られた話であるが、では、ミラーの批評的立場そしてハーディ論はそれ以降どうなったのであろうか。

脱構築批評家という表向きのレッテルは変わらないが、その後のミラーの批評においては、『小説と反復』にはほとんど見られなかった視点が前景を占めることになる。すなわち、J. L. オースティンによって創始された発話行為理論への関心である。これもまた主にデリダおよびド・マンからの影響によるものであることは明白である。時系列的に言うと、デリダやド・マン—両者とも、オースティンの主著『いかにして言葉で事を為すか』の元となった1955年のハーヴァード大学での彼の講義に出席していたという—は1970年代あるいは80年代にすでに発話行為理論への関心を明確に示していたが、ミラーの場合、そのような関心の表出は、特に1990年代およびそれ以降に顕著である。教育面を見てみると、1986年以後の勤務先であるカリフォルニア大学アーヴァイン校でのミラーの講義は、1990年代後半には何らかの形で発話行為理論に関わるものになる一皮切りとなったのは、1997年冬学期に開講された「文学における発話行為」で、その後「文学における発話行為—ジェイムズ、ブルースト、コンラッド」(1998年冬)、「約束、嘘、幽霊、死—ジェイムズとブルーストにおける発話行為」(1999年冬)、「ヴィクトリア朝およびモダニズムのイギリス小説—決意の瞬間」(2000年冬)などが続く。著作に目を転じれば、彼の発話行為理論への関心は、『文学の地勢学』(1995年)において散発的ではあるが明確になっているし、『文学における発話行為』(2001年)および『遂行としての文学—ヘンリー・ジェイムズにおける発話行為』(2005年)においてはそれがテーマまたは読みの基軸になっている。言うまでもなく、彼のハーディへの関わりもまた、そのような批評的文脈の中に置かれることになる。

このことを最もよく示しているのが、ティム・ドーリンとピーター・ウィドワソン編集の論文集『トマス・ハーディと最近の文学研究』(2004年)に収められたミラーの論文『「キャストブリッジの町長」における発話行為、決意、そして共同体』である。タイトルが示す通り、これは発話行為の観点からハーディの『キャストブリッジの町長』を解釈しようとする試みである。この小説においてミラーが最初に注意を喚起するのは、ハーディ読者にはお馴染みの皮肉な出来事の連鎖である。これはもちろんハーディの運命観そのものの問題でもある。物事はなぜヘンチャードを破滅に導くような方向に進んでゆくのか。その理由は複雑多様で一律に決定できないことを認めながらも、ミラーはこの小説において物語の分岐点となる出来事の多くが広い意味での発話行為—誓い、契約、結婚、名乗、告白、嘘、遺書など—を巻き込むものであることを指摘する。しかも、これら発話行為に特徴的なことは、それらのほとんどが結果的に失敗に終わるということである。これは、ミラーによれば、キャストブリッジの共同体としての機能の問題と切り離す

ことができない。というのは、オースティンが指摘するように、発話行為は社会的に容認され慣習化された手続きに則って成立するものだからである。換言すれば、発話行為の成功は安定した共同体の存在を前提とするのである。だが、キャストブリッジはそのような共同体ではない。それは、ミラーが言うように、「変容」と「崩壊」のただ中にある不安定な共同体であり、しかも主要人物はみな「よそ者」で、その共同体の有機的構成員ではない。ハーディは『キャストブリッジの町長』においてそのような共同体を舞台とし、その中で（空しく）遂行される一連の発話行為を物語の要となる出来事に絡ませることによって、発話行為を成立させる社会的要件の問題を否定的な形で提起していると言えるのである。

『キャストブリッジの町長』およびハーディのその他の小説はもちろん、小説あるいは文学一般は、確かに広い意味での発話行為を物語的要素として含んでいるし、言うまでもなく各々の作品を成り立たせている語り自体が一つの発話行為である。オースティンは文学における発話行為あるいは発話行為としての文学を現実世界における実際の発話行為に「寄生」する二義的なものと見なしたが、よく知られているようにのちにデリダがその関係を逆転させた。最近のミラーは発話行為に関するデリダの主張を支持し、そこにド・マンの理論も織り込みながら、文学研究にとっての発話行為理論の重要性ないし「必要性」をハーディを含む個別の文学作品で例証しているのである。

## 引用文献

Miller, J. Hillis. "Speech Acts, Decisions, and Community in *The Mayor of Casterbridge*." *Thomas Hardy and Contemporary Literary Studies*. Ed. Tim Dolin and Peter Widdowson. New York: Palgrave Macmillan, 2004. 36-53. Print.

Norris, Christopher. *Deconstruction: Theory and Practice*. London: Methuen, 1982. Print.

# 第55回大会印象記

伊藤佳子

日本ハーディ協会第55回大会は、2012年10月13日（土）、玉井暲会長のお世話により、武庫川女子大学中央キャンパスで開催された。まず午前部の部の前半では、今村紅子氏の司会のもと、橋本史帆氏と清水緑氏の研究発表が行われた。

橋本氏は、「『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」における意味の二重構造—主に外国人兵士たちを中心にして」と題し、ナポレオン戦争を時代背景にした両作品の外国人兵士たちを通して、作品と当時の国際情勢との関連を分析された。『ラッパ隊長』では、フランスに敵対する地域出身の兵士たちとアンとの交流シーンの中に、彼らの、イギリスとの連帯感を指摘された。一方、短編のマテウスの故郷は、当時、フランス占領下にあることから、彼はフランスを表象する他者だとし、フィリスが彼と駆け落ちを決意するものの、婚約者のゲルドが戻ってくると、彼女がゲルドを選ぶのは、現実的判断であるとともに、深層心理として国籍の問題が働いてマテウスを排除したと論じられた。このように両作品では、プロットと背後にある国際情勢の力学とは意味の二重構造をなすと結論された。

清水氏は、「『帰郷』における闇と光」と題して、キアロスクーロという観点から、作品中で描かれる闇と光を女主人公の運命との関連で分析された。まず自然は光でもあり闇でもあることを冒頭のエグドンの描写で確認後、ユーステイシアの合図としての篝火は、祭りの篝火と違って、プロットの展開とも関わることを検証された。そしてエグドンの光と闇のサイクルの中での彼女

の運命の展開を、月の光のもとでのクリムとの逢瀬やワイルディーヴとのジブシー・ダンス等で詳細に分析された。最後に、絵画的な手法であるキアロスカーロは、自然の光と闇が彼女の運命を翻弄してゆく中で重要な役割を果たすと結ばれた。

午前の部の後半は、麻島徳子氏の司会で、三氏が発表された。最初に津田香織氏は、「南アフリカ共和国の小説中にみるハーディー-英文学と英語で語る南アフリカ共和国の現状」と題し、南アフリカを舞台にした二作品、ゾーイ・ウィカムの短篇集*You Can't Get Lost in Cape Town*とジョン・クッツェーの*Disgrace*の中で描かれた南アフリカの現状とそこで言及されるハーディー作品との関連を考察された。まず両作家の略歴と南アフリカ共和国の言語事情を確認後、短篇集での『テス』への言及、*Disgrace*での『ジュード』からの引用等を取り上げ、アパルトヘイト撤廃後の南アフリカの現状を伝える媒体として英語は適切かという問題を考察し、英語を文学の表現手段として選んだ両作家が直面する言語の問題の難しさを浮き彫りにされた。最後に、植民地支配と英文学を単純に結びつけるのではなく、そこに見られる複雑さ、自己矛盾にも目を向ける必要性を指摘された。

次に工藤紅氏は、「結婚が映し出すコミュニティの役割—『カースタブリッジの町長』における人間関係の再検討」という題で、三組の婚姻関係について、各々の夫婦関係、コミュニティとの関わり、結婚後の人間関係を考察された。ヘンチャードとスーザン、ファーフレイトとルセッタ、ファーフレイトとエリザベス=ジェインは、カースタブリッジでは余所者であり、家族関係が希薄であることを確認した後、威圧的なヘンチャードと弱々しそうな未亡人の結婚に対して町の人が抱く違和感、夫との世界に閉じこもるルセッタへの反感、思慮深く謙虚なエリザベス=ジェインの結婚に対する好意的な見方等を例証しながら、コミュニティが力を持つこの町では、彼らとの信頼関係の構築が重要だと締めくくられた。

最後に唐戸信嘉氏は、「*The Return of the Native*における「古代」のイメージ—文献学者William BarnesとThomas Hardy」と題する発表で、1880年代以降のハーディー作品に見られる、彼の「古代」への関心に着目し、『帰郷』をその出発点として位置づけ論じられた。まず当時の文献学は、言語学のみならず、考古学や民俗学を包摂することや、バーンズがドーセットの古代研究に傾倒した70年代のハーディーの伝記的事実に言及後、『帰郷』のエグドンの火祭りの描写に、当時の文献学のアングロサクソニズムの潮流を指摘された。さらにクリムが北方民族の、ユーステイシアが南欧民族の特徴を有するとの描写から、二人の不和と破局に、南北二つの文化圏を対立の構図として捉える当時の文献学の傾向を認めた上で、ハーディーの歴史認識は、バーンズの文献学的考察に負う所が大きいと結ばれた。

午後の部は、武庫川女子大学学長、糸魚川直祐氏の挨拶で始まり、その後の総会で、坂田薫子氏の司会により、諸報告がなされた後、研究発表に移った。

奥村義博氏は、西村智氏の司会のもと、「‘An Imaginative Woman’ と ‘Alicia’s Diary’ の相補性」と題して、両作品の相補性、および、出会うことのないエラとトルーの各々の物語が作品中でどう統合されるかを考察された。「夢みる女」は、詩作を通して知り合った二人が出会いを切望するものの、皮肉な運命にそれを阻まれた「結ばれるべき二人」の物語だが、「アリシアの日記」は、妹の婚約者という悲劇的なジレンマを内包した形でしか出会えなかった「結ばれるべき二人」の物語であり、男性主人公の自殺は共通項だが、二つの出会いは相補関係にあると論じられた。さらに「夢みる女」では、二人の思慕はトルーにおいては激しい創作意欲、エラにおいてはmaternal impressionとして現れており、作者は二人の物語をmaternal impressionという俗信を取り込むことで統合したと結ばれた。

その後、三人の講師による、「ハーディーの面白さ」と題するシンポジウムが行われた。最初に服部美樹氏は、「アラベラの面白さ、ハーディーの面白さ」と題して、『ジュード』のアラベラをパーメイドというミクロ的視点から捉え、「ハーディーの面白さ」というマクロ的世界に迫られた。

まずアラベラを巡る先行批評に言及後、バーメイドのアラベラを誘惑者と生活者の二つの側面から考察された。当時、時代の花形であったバーメイドという職業の内実、つまり、経済的余裕と生きる自信を与える一方で、厳しい長時間労働を強いるものであったことをアラベラの描写を通して検証し、ハーディが当時の大衆文化を知悉し、それを作品に取り込んでいることを明らかにされた。そしてこれまで誘惑者の観点から議論されることが多かったアラベラについて、バーメイドの経験から得た自信によって逞しい生活者として生きる姿を浮き彫りにして、従来のアラベラ像に修正を加えられた。

次に司会兼講師の廣野由美子氏は、「不運」の美学—*The Return of the Native*をめぐって」と題して、登場人物と宇宙の内在意志との関係を検証し、彼らの不運を考察された。「閉ざされたドア」のエピソードでの時間的偶然の重なり、ヨーブライト夫人やユーステイシアの心理や性格が絡んだ不運の連鎖を例に挙げ、不運に見舞われて生き残れない人物には環境（エグドン）との不調和や不注意が共通して認められ、それゆえ彼らは内在意志の犠牲になると論じられた。またクリムの盲目性にも言及し、盲目性は見えない本人よりも他の人間に災いをもたらすのであり、盲目である方が内在意志との折り合いがよいと指摘された。このように不運な出来事の連鎖によりカタルストロフィーに突き進むハーディ小説は、中庸に欠ける点で、イギリス小説の特性から逸脱しているが、根底に流れる人間愛の精神にはイギリス的ヒューマニズムが窺え、イギリス小説の特性をとどめていると結ばれた。

藤田繁氏はハーディ作品の面白さを業という観点から論じられた。木下順二の『マクベス』論での「季節」という言葉（我々の平凡な日々の繰り返しの中で、時たま訪れる、「全く異質の、異常に緊張した、繰り返しも回れ右もきかぬひとつながりの時期」の意）を援用して、男女間の業として、シセリアとスプリングローヴの最初の出会いに「季節」の始まりを、羊歯の窪地での剣舞にバスシバの「季節」の始まりを指摘された。また木下は、「季節」は「内に眠る意志と外からの働きかけ」が微妙に一致した時、その極致となると言うが、藤田氏はそれをヘンチャードと粥売り女の出会いに認められた。さらに『森林地の人びと』で人間のthe Unfulfilled Intentionとして現れる業、テスの「季節」の訪れ、ジュードの果たされなかった三つの志、『霸王たち』において内在意志が織る模様を解説する年月の精などにも触れた後、盲目の内在意志こそハーディのハーディたる所以であり、だからこそハーディは面白いのであって、彼の暗さの中に人生の真髄を感じると締めくくられた。

最後に廣野氏は、事前に募っておられた、「ハーディの面白さ」に関する、他のハーディ協会会員からの意見を紹介して、シンポジウムを閉じられた。

その後、佐野晃氏の司会で、高橋和久氏による特別講演「英文学を学ぶ/教えること—ハーディを経由した詩人を経由して」が行われた。高橋氏は、ここ数十年にわたる、日本の大学の英語教育を取り巻く厳しい環境の中で、英文学を学ぶ/教えるという問題を、研究者および教育者の立場から論じられた。まず19世紀末のオックスフォード大学での、文学が学問として成立するかという議論や、F・R・リーヴィスの、文学へのアプローチが文学研究を孤立の道に進めたと言うピーター・バリーの論等を紹介後、20世紀後半の文芸批評の流れに触れられた。そして文芸批評における、文学には内在的価値があるとする人文主義的立場と、文学テキストを客観的に分析の対象として捉える立場に各々言及し、後者のアプローチでは、文学好きの学生の文学離れを加速するのではと危惧された。次にハーディを自らの師表と仰ぐフィリップ・ラーキンの詩‘At Grass’を取り上げ、多様な読みと学生の反応を紹介し、テキストの中に自分が読みたいものを読むご自身の立場にも触れた後、なぜ文学を研究するのかといえば、面白いからということになるかと結ばれた。

玉井会長の閉会の辞で大会が終了した後、会場校の「カフェ」に場を移して、懇親会が和気藹藹とした雰囲気の中で催された。好天に恵まれ議論の白熱した大会であったが、運営にご尽力下

さった武庫川女子大学および協会事務局の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

## 事務局よりのお知らせ

### 会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年間費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生は、一般会費のお支払いは不要です。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。よろしくをお願いいたします。

### 次回大会について（研究発表募集）

次回第56回大会は、今年10月26日（土）に、茨城キリスト教大学（茨城県日立市大みか町6-11-1）で開催されます。研究発表にご応募の方は6月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三つを添えて、協会事務局までお申し込みください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演は井出弘之先生（東京都立大学名誉教授）がお引き受け下さいました。シンポジウムは、向井秀忠先生（フェリス学院大学教授）が中心になって「ハーディとヴィクトリアニズム」（仮題）のテーマ等をご検討中ですので、その詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。特別講演とシンポジウムでは大変魅力的なお話がうかがえるものと存じます。会員の皆さんとともに楽しみにしてお待ちいたしたいと思います。

### 「協会ニュース」編集長交代のお知らせ

西村智先生が一身上の都合により本号をもって編集長を辞任されます。次号74号（9月刊行予定）の編集長は、昨年まで編集を担当された、現庶務委員長の渡千鶴子先生（関西外国語大学短期大学部教授）がお引き受けくださいました。連絡先は、「〒573-1001 枚方市中宮東之町16-1 関西外国語大学 渡千鶴子」です。

### その他

ドーセット州 Tolpuddle 在住の Sally Slocock 様からの連絡によりますと、ある電力会社が、非常に大きな風車タービン9基をハーディ・カントリーに設置する申請を提出しているそうです。自然景観保護の面などから、反対運動を支援する方を当協会会員からも求めております。以下に Slocock 様からの文面を抜粋します。ご協力いただける方は事務局並木（e-mail: yunamiki@rs.kagu.tus.ac.jp）までご連絡ください。Slocock 様からのリーフレットをお送りいたします。

"... I thought your Society should know that earlier this year an energy company submitted an application to build 9 giant wind turbines at a height of 126.5 meters each. These are

destined to march along the ridge between Tolpuddle and Puddletown. They will be seen from a very large part of Dorset and we believe they are totally out of keeping in the Dorset/Hardy landscape. We have formed a group to oppose them (T.A.I.N.T: Tolpuddle against industrial turbines) and on their behalf I am writing to see if any of your members would feel like supporting us. The way to do this would be to write and object to this application to West Dorset District Council. I attach a leaflet we have had printed which explains how to do this. It can easily be done via email. Thank you in anticipation of your help.”

#### 《内外ニュース》

☆『トマス・ハーディ全集』（大阪教育図書）について、昨年配本された2冊を紹介します。

佐野晃訳 第8巻『熱のない人』（2012年12月）

粟野修司訳 第14-2巻『霸王たちⅡ』（2012年12月）

☆講演会が行われました。

時と場所：2013年1月26日（土） 関西大学

講演者：森松健介先生

タイトル：「詩のパリンプセストとしてのハーディ小説—詩劇も視野に入れつつ」

#### 《編集後記》

本号へのご寄稿をお願いするため多くの方々に新年早々ご連絡いたしました。それらの方々のうち、ご多忙にもかかわらずご快諾いただき玉稿をお寄せくださった渡先生、武井先生、奥村先生、唐戸先生には心より感謝申し上げます。また、伊藤先生には大会印象記をお纏めいただき、武井先生には原稿とともに巻頭掲載用に貴重な写真をご提供いただきました。ありがとうございました。編集・発行では中央大学生協印刷係の藤様に、事務的作業では事務局の並木先生に、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

次号は2013年9月発行予定で、原稿締切は7月10日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度を目安にお書きください。

